首書

源氏物語

五十四

尊經閣文庫

○河 津第五 巻名ありと云て手ゑハとゝれと云れ公文行立もうつときしーゝをゝふ
○花 宇治八 巻名八哥ゝと詞ゝと云ゝゝ薫廿三歳の春より秋まてのゝあり
○弄 出巻八浮舟巻の終の其翌月事也三月ようりて秋より成也薫廿六歳 ゝをゝふのゝ蜉蝣蜻蛉陽
焔芽之儀あり蜻蛉のやうゝもあるやうゝて八蜉蝣ゝゝのゝしひゝとゝ云ゝ又草とゝを
ゝゝといふゝをありとゝゝ本草ゝ蜻蛉蜻蛉之一名 向云蜻蛉とゝゝゝゝ一名蜻蛉といふ虫也
蜉蝣ハとんもゝ也ゝゝゝゝのゝ八春の陽氣といふ也
○うゝこゝゝゝゝ 花 浮舟巻乃末ゝ姫君ゝ我身をとゝしゝゝんとゝゝゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
身をゝゝゝゝゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○身とるき　河　古今　世中のうきてひとつに身とるをいかなるさ谷てをわさくるなり

○いとゆるつるるさ　孟　母ようの文に羽衰也

○てるひはゆめよ　河　こひしさとるるつきそうるくさまんわろよるもれは夢ちるよそと

○ものへまてこせ　弄　業へまてこせりはんと定ゆるる也近月に月のるるくきれもるるとゆるとるくとくはは母のくこまつひくすんも也

○ものへまてこせ　弄　業へまてこせりはんと定ゆるる也近月に月のるるくきれもるるとゆるとるくとくはは母のくこまつひくすんも也

○人のはくり　花　母君のくこ人返事よ　後よ文あひくんるとありくこ人ゆるよゆめよ心まくくて　巻数よ

くさつきくこ哥　くこの音に月のるひくさるれとくくて

こまつせるさぬと君よつくよ

○されはよ心ありくさ　或拾　右近の心也されはくくかくこ

きんと思ゆくるるくこ也

○あ一とり　河　伊勢物語　前勘

○いろ〳〵はく　盃　身とるまるとせんくまでハすべと
右近うゑん

○いろまるせんく　花　ゝゝれるゝと云ふも物のさ
さハいろまるゝていろまるせん
○宮ゝゝしいと例るゝ　花　世君の哥　うゝゝゝゝき
世中よゝゝゝとハいろくゝとゝゝゝ君もうゝゝん

○外へいきゝゝれ　或板　外をるまんゝゝゝゝハゝひ行ゝ
ゆきゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝるゝんと云ふ也

○いゝるゝゝゝ　盃　白宮のは使うゝゝ也

○心もゆく　或板　時方う從者のいやゝさりのゝれ也

ゝものやゝなりいゝゝゝゝゝゝ

○くるんと　孟　白官へ出使のドさせらる也

○いくさまろぬると　花　えのよ俄こうせがつらしてよを使う委もとらて帰系て左うくとドけりしの八俄こうせがつるとちよがへるとつまとと宮の心えるせがつていくまろぬとこさるうくきのみのれくりもうそるくありしものとしらがる也

○時方いきて　孟　時方と宇治へけるとまろる也

○この大将との　万水　時方う初也　芝のいやうれるとはがるや世ろハしのめくとをきしりくのがつをるる

もとでまうりうるんとドきせらるのまろとぶでいくわやをれがいくとどあるもきるが見ぶつる者まうとのこうてどいこのうとこいさうもくてきうもおうもどなりしものをとぶがやうこるまれがらをうこいうてきこうてうるまうこのきけとのがへがうのたるどのいうるうすきがまけがへうあどいまうあがせうる

○とろろるるて　万水　何とそくろをるるて八まろうくさうをと時方ろドも也

○ろろ〻　河　勿論也

○ろろ〻　万水　芝の兵食あとせがるもと

○さうとて八ドと　孟　白官のうるるての約也

下ろへのまうつづうをもドとがとしがるかれがくてるてふくてうきうこうるうんを花のきこしがるがおがわうまふへやがうんきてあうふへのこせうまうんをうるうあさふがくへこげくがうんをとやる。きうとて八ドと紙がつるふてやわんがをとくきうがきあようまうてきこのうこれがるあがふあのているあるまをくつがくあいせどをすらがる

○いとあるさ　盃　白宮の内殿と時方ら喪と云也

○あもそう　弄　浮舟の身とうきて夜のあるる月に喪也
此喪の日字治院にて僧都の浮舟と尼ろをなすらん
同月ろ尼ら手習巻ろ尼ら

○さく　盃　葬送とせんとして時方ら子也

○さく今物ものと　或抄　右近ら時方に返答也

○さろはうひはう　万水　浮舟もう或抄に立ら日
ろんるも今夜はうれいなるれも

心ちもうしくはえあるくあと

○さうしとく　万水　時方ら約也　今二郎と侍従ら也

○いとあさましく　或抄　侍従ら初也

○ひとよいと　花　白宮の知らて物ものもえのはは
てむうしく侍従はうるあひらてうろはひる

ささらるるく　五水　孔毋るものすと時方ゝ也

○わらはん　盂　吾君也孔毋の羽也

○むすびさゝを　河うろせ人ハうをとるもう
ゝまつほう草の出ゝ也

○いろしかひわろ　細茎の方出京有へきる也

ゝ人のいろ〳〵ものむ人とゝ帝尺る　河　宋玉答屈原作招魂詞曰帝告巫陽曰有人在下我欲輔之魂魄離散汝巫占之　王逸楚詞章句註曰帝謂天帝也巫陽神醫也餘生欲老南海村帝遣巫陽招我魂上東坡

花　焚天帝尺ハ人間をつゝさゝる天也帝尺ハ切利天の主也或按ゝ治大納言物語ゝ浄蔵貴所ゝ父善雄公のゝせるといのりゝ〳〵しるゝの有とひ号又河海ハ宋玉ゝ答屈原招魂詞をつゝるゝをゝりゝれ　爰の詞ゝ不叶別ゝ帝尺の人ハ死せるとゝ〳〵しる本縁めゝ〳〵重而しるゝとゝし

○ゝゝゝるゝ　花　時方ゝ名ゝうゝひやゝ
ちゝ〳〵しゝゝゝゝゝハ又孔毋のゝをゝるゝゝゝ
きゝ是ゝ心ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝまゝとゝんゝてまゝるんゝとゝゝた
ゝゝよたのゝゝゝゝゝゝゝふゝゝ命
ものびゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○[illegible] 紙 時方ノ羽

○[illegible] 細 白宮の[illegible]也

○君さちる 孟 右近侍従ノ[illegible]也

○[illegible] 河 楊貴妃歸 唐帝思李史人
去漢皇[illegible]

○[illegible] 細 侍従ノ羽 或抄 侍従ノ心

○[illegible] 或抄 [illegible]ノ羽也

○月[illegible] 原 白宮の[illegible]冊の紙[illegible]

○あのあの見るから　或抄　差とり時こゆること
ちからをひとをそ好るる也

○そこのうち　或抄　差のむ人好そんとの用意と
そて白宮のすがたをそこ

○心ろ　或抄　浮舟のる也

○心と分と　或抄　入水をちとかのあらいて也

○心えて　細　時方心也　そこのそこ　或抄　時方行

○今ろろ　孟白宮のそこあて出あるべきと
時方の事也

○あるべきをる　或抄　侍従の行也

○中ていとき　細　浮舟のあるよ過分なるべきれ
ととと也

しくらひつでもそこあること。
そまどわまわからばわのあること。
こころうえでこそりしてそこそ
のどかまつんこちあるべ作る
いとこそうぎこちやうり。いま
こうこもあるまるとつべ
あるべけが今こあ人の知
きこしまんもかきはなるこ
なりくあどこきはまるこあべき
しるれどこのびあひこまれ
どやこいきこはそこやこ
つんまんはこそうぎあ作るべき。

○ろつまきさいはを 花 むすきさうのあるうちを
後のるをといとるむすも也

○ろろのゝやろろ 盂 時方をくゝる也
○石乃いろろし 弄 浮舟うせ給ゝ翌月の歌也
○さうよいんさ 或抄 母の付 万水 母の心

○うるるをとの 巴抄 白宮と浮舟とのるを母ハ
ちりぬるをハ也

○ゆくやひつん 花 伊勢物語の鬼くや一口よりひとり
と云ハ堀川の内ゝ国經大納言るの三条后をとり返奉
りゝゝと鬼といふ也世物語の鬼ハくとくて云實の
鬼よハゝも 又江談ゝ小松帝の時仁和三年八月武徳殿
松原有鬼食人是則大怪也同廿六日帝崩御是其徴
歟ゝ是ハ鬼のくとゝふゝ也
○狐やゝものや 花 説文曰 狐妖獸也鬼取乗也ゝ
寛平年中備中国ゝ賀陽良藤狐ゝゝゝて十三日
舎の下よりしるあり

○さてハの 花 芸二宮のゝさるのゝ乳母やゝのくや斎
とのむくゝゝくゝてゝゝゝゝ出てゝしるひ
ゝゝくとゝく

○ゝむくく巴抄 芸のむくゝとわるむゝ

○ゝゝのくくゝどゝゝ也ゝゝ
ゝとくゝゝゝゝ

○いとゝるれさり　或抄　宇治の女房とも此女を咎迫
○ゝるゝさるゝと　花　ゝるゝゝゝ

ことをやすらと　弄　ろうろうまーさと

○うをさて　盃　いうるろうも死骸をとりてあつふ　そと

○ろうふきーさ　或按　世のつひるわ必也

○うろうも　盃　いうろうハ右近侍従さうろうハ母也　母也

しうろうさうろう多也

○さいこのいと　盃　さていハ水をるきを流と　母のろう也

あうきーハあうーしさ川也

○いうーそれを　巴按　母も也

○大海のうう　河　日本紀　溟渤を大海とよりうう

とハ大うるうるうるいふ義也　水原按うるう物

語よりあり可勘

○ときまうーなる　或按　母のうる也

ぶるあるをうのまーよゆんん

てうーいーぶ　ふうあうさーと

りをうんうーぐりひまーの名

海ふうーあうろうもちう

んがうあうーまうるんうーもう

をうきてあうーふをうの

れうーあうきまえ目ーうも

ーぐうーふうまあうーぶをう

えていまはーのきうーをーだ

ううもうーうーうーひてゆーて

ありしう海をきーゆるーふんう

いうえうのゆーぶうーうーうもハ

○此人はゆう　或抄　右近と侍従と

○はるゝ　河　孝武皇帝葬衣食事　上日吾聞黄帝不死今有冢何也或曰黄帝已僊上天群臣葬其衣冠史記　日本紀日本武尊化白鳥從陵出指倭国而飛之群臣等目以用其柳槻而視之明衣空留而屍骨無之

○はてこの大とこ　弄　浮舟の乳母子九大德なや

○太まうしはり　弄　宇治のこのの人内舎人右近太夫也

○このよ　万水　苦也内舎人なるこゝ羽也

○こゝさゝよ　或抄　右近なるこゝ返答なるへし

○なくしのくさうして　弄　室八嶋古事別ゝ注ヒ人もなきを死人のくさうして葬ゝる例也

○きくのさかり　花　入棺拾骨すべからざる也

○ものとくしく　細　のもりよ　野余りなり

○そうしゅうのもろ　花　父母の中より親あるべし　兄弟
のるひしくしうあるべし　後のるとしのもろ中人より
ひさうとろ也
細　花鳥ゑ　若あるべし　鞠ゑ　人とハ兄弟有
の長なり

○ふとしてもろ　盃　黄のさかずきハ人ハ
ろとひかんと

○さうしのもろ　或物　白宮ハ　ろかろとうろ
あるべきんとをれも後よハ　ものろと

○ハやとも　盃　白宮ハ　ろもろさひかち
ろ　ろ　黄のさうひかんと

とふとろかてろろ
わおけ　ふ　ふ　ろ
とろくしかるす
とろくしかるす
ろろものもれふとあや
しくきのろかるべわろ
どもろるまるぶとくし
わとかてもろかろ
しろつもれふろ
ふとろかるべ
ろかるべ
ろかるべ

○きさのわくてー　或秘　今朝八用章をとるハうそくさんとゐ心もとうー

○うーへてハ　万水　左近侍従ちう心よ後よりくもつ今ハ随分つもんとく

○て今ハくるすさ　花　芝のさかりて我ともをとうこうろのくるすさハつさよりくさとく

或秘　身をうるをるくさ　ハつ芝のうるすさとさあくしくさあんハ海毋のうあてゐくと

○入道の官ハ　弄　廿三官のうるやた也芝ても切すく

糸竜あくとう也

○とうくくくさるんとも　或秘　海毋のうせあくるす

を宇治とうくくくつをまくとくるさ也

○人あと　万水　左近ちう心也　芝のいきとうるハ

ゐてハ世上よハうて真實よりいれ故ハわく

ゐくくくと

○いろくさるハ　細　芳しらの西使れしなり也

○月とうさうて　孟　三月ノ十日ノ為ぶうろ

○しんのうハ　細　葬送せし作法のなり也

○このあり　孟　芳の我ありさま

○大くらの　ゆふ　細　仲信也

○るまこは　或抄　但よむせひうろうこつをて
返答もなしと也

○るをとしてあくる　細　芳の心也　しるるる世
宇治の里れうりさま

○ありるるや　巴抄　あの君をる成ぬゆへ也

○思ととろるとち　孟　宇治よりきれハそ白
宮もいひとりのつれと芳の後悔也

もうをるがうのいつまーさ
ものうるのたらってのまつ
ゆうるのまるをもいぐ
いらぐまるまとんをるのさま
どもあれどでるぐうあがき
くろづりをうぐってくるぐし
くもいるやばあるわるの花
いあるくるぐまるれるも
ろろうけるとうろうかやよ
るどやとしんおぐていまるぐ
うるとうるのやをるをるうんおも
をおぐろうすぐのまぐれあるや

○ゆくへ　孟　ゆくえしらぬこと

○ふるさと　細　女三宮のもとにおはせしわかれを
とくりかへしハ也
或秘　女三宮ハいまさら石山より急ぎとかくもう一度
女三宮ハ急ぎおはせしかハ代々芳の急ぎ也石山より
宇治へとくまゐりかへりもまゐる事へ也

○アクやのはて　弄　女三宮のはて方よりもうらやましハ也

○しくしくさかと　或秘　芳のもう女三宮への消息也

○わりしなくもち　孟　浮舟の躰とくりの心也

○うてのせよハ　巴按　浮舟現在の時ハ母ひとりにて
今くるしきこと

○くるるこの　巴按　あま君又今浮舟ゐる也

○さまとこそ　細　道心よりとくとくし心也

つきせぬとこそかくいうこと世を
ゐのがれさるゐ命おりしさ海ぞこう
いとあいぶかしづきかしこうり
さらひあどのいづくこうひしくる
しまれがうこの世まいあどくし
もおりひいまてどのどうあてゐ
しきんこで今いさうふおりひづ
りんくこあさまよ今中さ中
のうどきつまがうこのすちがあ
はまていこで和おりつぐさず
世おりくりさ海こそふこうぐ
さりしあのおりしのおりかく

○例の人うて　弄　世の常此人のやうなるうてひ
ちり心うせてうらと

○ちひとも　細なるきをすてゝて佛の方便
ゝてくめうらと

○うの花やとく　花　是ハ白宮此ちひるきを活る
といふ

といの人うてあづ〳〵ゆうを佛も
うく〳〵こうんうあつまるや人のんを
おとこせんとて伝の〳〵活方便
ハ慈悲をもつて〳〵やうゝそ
ハあれとおりひつもつおとい
をのこ〳〵活ふのこやうてまて
二三百ハかのもおづこ活もど
うつどうりあさ海てい
かうはりのきるんあどさりど
よやうくあこづつ活のてゞ
〳〵づまうふもうあうちさ海
ちひくいこどおりひいで

活むうん人なのたこでゆやまのお
きを海ものこうん世てうくすうう
かういやめのうきこうせでと
うこうしてくすと活ゞもれど
をのづくいとこううもれいうか
うこうあうゝ活ゞ〳〵きこひ活命
もあやうきまでづこ活ん人云
んもあうもれいうのうのあもいと
うこの活をてきこをまてこうきん
よこきこだうるを白あのうこだよ
りのこうあいあうこあううこん
こきんていうあうゝさあだ〳〵

○それハよ　或抄　茎の心也　白宮の浮舟（文よ
そこうこうこう

○こうあるもの　盃　浮舟の在世より白宮との名
よよとなるを可出来かとなり　八月ひをさ
むるとなり
○名やのはとなり　弄　白宮のなやませ給ふ

○まいりさうも　細　白宮なるや名と芝のうち
給ふ物もいうとなり
○そのうち式部卿宮　花蜻蛉　式部卿宮系圖は有
桐壺巻門のはなるれハ芝大将のなりよめり
軽服着給也　細　〻私の思ひ有なり三の
極服のなり出来なるなをとさ出なる物語のつく
る殊勝也古来の称義也

○ものうらんのうちのあそれなとひ
ようくらもてつまぐくくる
もとうなりやそいとぐらあり
ことことまうりうまうりんぐまる
でーしやうるうるうるうるえ
ーしづてのこわるうるうるうち
るれぐらとくんのそれるの名
ひんとのうちのもいへんん
すぐうりんーしまうぐもわる
どんとなるんもつふくつて
まーくんなるもいとぐるとぐ
のまぐせとぐとをとあぐ白ご

○とこーなりやせて　万水　芝のうち

○なーうるなて　弄　真實の違例をそいうとなり

○名てなるんー盃　白宮の芝なるくんもめるく
又名んるとなり此羽専要となり

○はるゝくしき 細 はるの病 はるのもとゝ
孟 是より白官の羽

○うちうち宮うゝ 万水 れ門又明石中宮の所也

○をゝ世中の 或扱 泪 はるゝ〳〵つまの所也

○はるゝをもゝ 孟 浮舟のるゆへとハよりも芝の所
ゝゝれゝと白宮の心也

○しゝめゝ〳〵 花 此羽ハ上よりも尽ゝうこゝろ〳〵
又目ゝうゝ心也 弄 ゆめるゝ也世ゝ〳〵しゝさ也

○はるゝやゝ世ゝ 花 是より芝の所心也

○此君ハ 孟 薫也

○こゝうゝ〳〵 細 白宮の心也
世扱 芝ハ浮舟のゝを大ゝよ思ゝと思所也

○ゝゝ〳〵〳〵鳥乃 河 可僧病鶯平夜驚人 薄媚
狂雞 三更唱曉 花仙蘆

○心とゝゝんは 或扱 浮舟のゝゆへと芝の推量所
ゝゝむ躰ハゝゝ〳〵〳〵ゝゝ

やはいしづめて やどゝ〳〵さ
ゝちゝもゆゝをゝふ人い
ゝゝしづさやまゆのさ海ゝうこ
のゝものゝれどゝうゝもゝよ
もゆゝさゝゝぶゝゝゝくぎよ
世中のゝゝをもゝゝゝゝぎて
くゆゝのゝゝゝゝゝゝのゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○まさしくハ 両 まさもこうまたハ[illegible]
柱ともむつましやゆうとゝ[illegible]ハ
弄 蓋を白宮の所んして浮舟のそうゝ
むつましくゆんもう心也

○いとこゝろそしも 或抄 蓋の心

○むつましう 弄 蓋の内白宮との中ゝ也

どうゝ[illegible]めくれもうちん
みもつゝぶ[illegible]ぶ[illegible]中のつのあき
ことをきゝても物つゝんへも
つまあきこゝろやもくもこゝろ
まくも物ぐさうもめうゝまき
ぐらハわうまあつこゝまむしへ
ゝんまも物ぐやうよぐこゝ
ぐゝとうもまり浮ぶゝ
この物ぐうきこゝ浮よいとこあ
てもハあゝと物りてもゝ
うゝこゝろよきぐもこあてる
えゝ也めるのうゝ浮うぐゝハ

○今ハ中くの花 位ゝうゝるれハ男をゝうゝて
くゝもさいくゝようあゝねるをとゝ
弄 蓋れるゝまゝての浮羽也
或抄 大将ゝ成ていゝゝるゝて細ゝまつゝねゝとゝ
心ゝや 花鳥の笑 駅 相違ゝ
○もゝて四いゝま 万水 白宮のゝうゝと蓋の浮ゝ

○ひゝつゝん也 細 是ゝう宇治のゝをゝひ出
浮ゝ
ゝゝゝゝゝゝ也 或抄 大君のゆゝうゝ

いゝうぐ也くの[illegible]
をゝまはゝくのゝ[illegible]
ゝて浮ゝまて浮ゝまあゝ
浮ゝまゝ物ゝも浮ゝねぐゝの
あぐゝのゝゝあゝてゝえゝぐ
ゝうぐゝゝゝゝゝあゝてゝぐ
浮ゝゝん(ハイ)ゝ浮ゝんぐ山
ぐゝゝゝあゝてゝ也浮ゝ
人の物ぐゝゝゝゝ人物ぐゝ
ゝゝん浮ゝゝまゝつを浮ゝて
ゝゝぐゝゝゝゝゝゝゝハ

○人のそしりをも　細　女三宮と語らひし時分の心

○此あやしとは　万水　宇治のあるじといふ

○又これもそしり　細　白宮のそしりなりといふ
世撥　ちとあるじる羽也

○あんなるなく　葬　浮舟の心なのしをるさまも本
墓ちものやうよ物くしくしきわみ人なるさハ
ちらうとなりてもてしと

○いとあるまて　盃　浮舟の身也

○ちとあるもやうも　或撥　浮舟のなハ白宮なる
を語るもあるしくしと　一説浮舟のなせ
しるはなを語るしくしと

○これしいと　或撥　若也まへの白宮のひ
語よ所をしるといふ

○あやしくいとかと　或撥　白宮の心也哀をそ
へしやとあかせをまとあるしくしとあひ語はんも也

○いとあるわるる　細　白宮の羽也

○ちとあるとくて　万水　若の身ひ語ふと宮語ハ
ちとあるしくしとあるとく

○さらさらそも　細　芸の初也白宮こそせさてまつりしかと又ひんせんさらも有さらしかと

○宮さまつり　弄　中君のうへ也

○もそもそさらさらと　或拾　ちとりのわり浮也

○心ち例さらん　或拾　又芸の初也

○いそのあいさらも　花　是ハ芸の我さまさらり浮て白宮のひさまを思ふる也

○さらさらの　弄　浮舟のうハ宮ひさまをれいさらん

或拾　白宮又芸のさらのさらさまをせさらん浮舟も宿縁さらしかと

○乃ひのへそも　或拾　白宮の本堂ハ六君又中君

いさらさらもそもさらさらの

○いそのあいさらも　花　是ハ芸の我さまさらり浮て白宮のひさまを思ふる也

○さらさらの　弄　浮舟のうハ宮ひさまをれいさらん

或拾　白宮又芸のさらのさらさまをせさらん浮舟も宿縁さらしかと

○乃ひのへそも　或拾　白宮の本堂ハ六君又中君

いさらさらもそもさらさらの

○此人と　巴秋　浮舟以下

○我もとゝのの　細　茅の代我身も女二宮の外よ
りゝとゝ

○ゝゝゝ　或秋　くハとゝとゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○人不石よ　河　人非木石皆有情不如不遇傾城
色白氏文集　心非木石豈忘深恩拾遺抄
伊勢物語　いとゝゝゝゝゝゝゝゝ

○夕されいと 河 古今 ゆふ衣ひもゆふ[illegible]
[illegible]

○やとよりて 河 古今 [illegible]
時鳥 [illegible]

○[illegible]の宮 [illegible] 花 二条院 白宮渡 [illegible]時也

[illegible]ひねや哥 [illegible]也 細かのわ[illegible]哥也
河 [illegible]の田 [illegible]時鳥 [illegible]田長 [illegible]
[illegible]時鳥 [illegible]途 [illegible]農耕 [illegible]
[illegible]也過時不熟 [illegible]
[illegible]也 花 拾遺 [illegible]伊勢
○[illegible]やハ [illegible]君の 孟 中君の浮舟 [illegible]白宮
の心[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

○ゆうるゝ　巴拨　ありのまゝなるを中君へ白宮のうゝ所なり

○ゝくゝハ　細　兄弟をいふ

○ゝゝゝ　細　六条院よりまゐらせたまふつよしゝゝのそわうひ所へハねじつゝ白宮のおかを也

○きいるゝ　或拨　白宮の不例のゆゑ也

○ゝゝハいゝ　万水　二条院のゆゑ也

おぼゆ。ゝやもくきあるものゝ。ゝゝて所ゝるもいとゝゝ。ゝれば。わるゝゝ。海ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ

○あやうくまうけうの細 右近うとう心のくちに白
宮のれ出れよいさとうしこのわくまつのまと
只出るる也

○さるまーさる弄 白宮の使まさるくの心也

○てまきてハ 万水 時方宇治より来て只出る也

○くの所くせて 或拙 時方の上也

○今まうまくも 万水 右近り羽也

○ものまうんと 也拙 物まうてとりひて白宮へまうく
んとく

しくまうつまうちあづーとの
ねんいとくんとうどどおやうく
みうぎうのそばしーもいまちまち
どあうかーとおりしいづるもを
をーさるまーきとを弄かー
とうてとかんづーくんとれまう
まどうてまきてハおりーまく
うかくのうさ風いづうきとて
まうくまうのてあまのうれひ
とうひのおてまうくうまうす
うどを弄りのいづうとうづよ
きんかくわうまかう宮遊ひ

いうづくかくもとうかうくの
まうをてけうくひるんまう
まうとうつぶ今きふんあや
とうひあうもつまーく
まうてもうくくきう
あまうひどうのきこさま
づきうちーけうざこの拙を
たてくわうさ風まものるんと
んまうひるきんもまうーまう
うあづさうどまあてそうう
うかのうのうけうばいきう
づまうかうるん弄かう也手

○大まもりきて　細　時方也

○さゝゝ此中の　或抜　時方羽

○君ちとゝ　弄　廿房達ゝと終よハつゝまし
ゆくゝさるゝゝとゝひゝゝハいゝゝきてゝさやう
ゝもきゝてゝさゝゝゝゝ
或抜　浮舟と玉くむくゝゝゝ時ゝゝゝ

○ゝゝゝくゝの心さゝ　弄　浮舟ゝゝゝゝゝゝて後ハ
中くゝ心さゝゝもゝゝゝゝゝゝ

○いとあさ也　或抄　浮舟のすがはゝ忌をもくまうひ
給ふ事体しなゝ之浮舟の忌まはこうりおけても
よろゝしゝ

○のこりの月　或抄　三十日の穢らんハ也

○あるし山家　万水　白宮のゝを侍従うゝ

○ゝろゝきわゝも　万水　侍従う服衣のゝ也

○とハゝ今　弁　つゝん人ゝ知ゝをゐゆゝは裳とゝろ
ゝるゝて服の色ゝもゝゝゝゝゝれいゝと色

ぎ海の師てゝどもハ仕ゝまど
いゝゝあゝゝ也ゝゝまでゝゝゝゝ
ゝんみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ也ゝのてゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

○そのようきゝ　弄　さるとうかゝとわそ
るとゝゝゝ時のる也

○ゆかしくゝ　巳抄　大やうる心也

○ゝ心つゝき　万水　八水のる

○さゝゝさそ　巳抄　うゝるんる夕八前世定よ
るゝゝ　仏ゆゝるゝゝきるゆいゝゝと

或抄　定業ゝも自害ふゝるゝきゝと是一説也

○れ文とやき　弄　世すのゝゝ安と自官よ侍従
うゆゝゝとゝゝゝ世ゆゝそゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝと　或抄　夜とゝゝと侍従ゝ海毎
のゝとひゝゝひゝゝと

○うゝよゝゝの　細　侍従ゝゝ也

○さうもんよ　或抄　白宮の判

○あるべき　細　中君もよりて外るべき

○さてさうもんよ　孟　侍従の判也

○又もちのれ　或抄　白宮の判

○この中きり　細　浮舟の料也

孟　浮舟のあり用意ありしを侍従の引出物よつくさわり

河　櫛箱一双　衣箱

○此人よ　弄　此人よ　孟　侍従よ　相應　記者の詞也

○なのひとれと　或抄　侍従の判也

○右近と　或抄　宇治　とりて也

○ことうよ今あり　細　人の答

○うち出の　細　出服の時分

きくあつまよ　はべりとよ　はべりとよ　あるべき　もてなるべく　やいとの　はべり　さぶらんよつもてもよりてこ　うもんとあるべきまつまバ　このけてふどすぐてどる　ゆみもまつまふどこの人とまん　あるばはべりとあるべきようつる　よりのはまてよりてまるまとせ　はべるべてのことてうしいどろ　どこてうしいどろあるせまを　はべるべよせをはてうる

○此人よ　弄　此人よ　孟　侍従よ　相應　記者の詞也

○なのひとれと　或抄　侍従の判也

○右近と　或抄　宇治　とりて也

○ことうよ今あり　細　人の答

○うち出の　細　出服の時分

はべりとはべるべ　はべるべ　あるべ　はべるべ　はべるべ　はべ

○ひとりのたまもの　或按　坐下芳の心也

○此文殿の　盃　八宮也

○此ゆりよ　或按　大君又浮舟之

○いとゝゝゝゝ　或按　八宮へ近付奉りし佛道の心ゝゝゝゝ

○あやしさとの細白宮の門あるとてろ〳〵と
をせしと

○くもあやう細業の實やうるむひろる也

○あり〳〵るる細入水のる也

○さるよあし細業の不審ろ也
万水業の心也

○あかしろうろへハ盃浮舟の心ハやうろ入水
るとも人きくハるろしとと

○いろるる苗ろ或拔白宮のろ入此人くりろ
らいてるしろとうろいも也

○宮とあり〳〵巴拔白宮も伍愁傷るれハ入水
必定ろとろるハせるやと

○ことのあろ苗も或拔つろろとハろとと

○うくあろ〳〵万水業の字治へ出のる也

○あかしろうろへハ盃浮舟の心ハやうろ入水
るとも人きくハるろしとと

○いろるる苗ろ或拔白宮のろ入此人くりろ
らいてるしろとうろいも也

○宮とあり〳〵巴拔白宮も伍愁傷るれハ入水
必定ろとろるハせるやと

○ことのあろ苗も或拔つろろとハろとと

○うくあろ〳〵万水業の字治へ出のる也

ごとずくあるよあるろかるもし
人いいぞうさろ地ぞろくくしさ
とといおりひしろづさぞいうあろ
さまるよこのみぐもそふしていふ
みろあんとはころるもろんぶ也
あさり拾へどこやも拾りかし
るもおろろくきいとろる
ことのあろ海もまろうまあ
はろろんきろひをものづう
ろんこあべきをくおろまもろ
るつきてもうるくいこぐさと
をぐこしものいいひてあさ

○はしもよりて　或按　草の羽まさうひと
のうてうくとも　注也

○我をろり　孟　浮毎の我とう　尺注へさきの
ゆとき

○いりやうろう　或按　入水もろかしのるハいのやう
るうりのあしそ草ハ誠とも注ハもとき

○さんハとし　細　右近り心也

○とのつくさうこそ　或按　右近り羽也

○もしろあかと　細　八宮の字治そこて生長
ろ浮くさんの見ひるもろあつものう人ろう
浮しるゆとき

○世ろるれしろ　万水　字治のうり

○ろろろの　細　草ハ何ものくさん注とく
えさ色注よりとうのはるのの
るげさをさんおぐさあくまうひ
つこころのどうあろさ海ろて
ともくもんさてまつを注ハ
ごさやうのいはゆとおこころる
いでくハの注ってぎーもろ
めるとをろのはかいうのみごさ
さ海ようけろ海ろこもも注

○心のとろるの　巴按　京へむろんとあかせれ
るとき

○ろろ出てハ　河ろろ出ていくゆしろ山川の
さろつ心をせさろよ注ろ

しーんの在さおしかろはとまる
のろちいつろくものをちと
おりとあるもしそだまろ
くろろおりまるをまちや
えさ色注よりとうのはるの
るげさをさんおぐさあくまうひ
つこころのどうあろさ海ろて
ともくもんさてまつを注ハ
ごさやうのいはゆとおこころる
いでくハの注ってぎーもろ
めるとをろのはかいうのみごさ
さ海ようけろ海ろこもも注

○うてきうつぬ 猛 人くゝ 強 ゆ ん くのすと
とうわゝとつく

○うの所くゝ山も 河 浮舟の母君のすも也常陸殿
妻うれ八當国の名所とゝ也

○心えゆせうゝ 細 るゝこゝろ比ゝもゝ品の
哥のすも也

○此ものの人らし 或秘 浮舟卷よりしる也
内舎人とゝうのらひしすも也

○あやしさ及よ 或秘 浮舟のあやまりのあるよ
ひすゝうゝと若のよ所てうるゝ所よ

しようてさぶ母八どもうゝ
しきゝとよりひゝまへさぶ
うのつゝふもうゝしてゝろ
ゆゝうゝきすてゝつゝ品
ちんゝをいとゝるこゝりひ所へ
しようゝろえゆ所せうゝこ
所うゝよこのゝるゝぶゝ
ゝうゝ物どりゝかたちゝ
ぶゝうゝるゝどいゝゝめゝせ
らるゝゝゝるゝどやてゝものゝろ
えゝどゝくゝしさゝ年へども
のゝやゝきゝまゝよゝうゝるゝきゝゝら

案のゝとゝ若ゝうのせゝうゝくれるすしゝと

○ゝうゝくゝうゝれ 或秘 若のゝうゝひゝうゝ所て
ゝうゝをゝて所ゝ八中ゝくゝよへゝうゝへゝしゝゝ八
母のゝうゝをゝんゝと浮舟の連ゝこゝうゝをゝゝ所ゝうゝ其
ゆゝ男ゝとゝうゝるゝひ所ゝんゝうゝの外ゝゝ品ゝゝゝ

○ゝゝ所ゝゝ 巴秘 ゝゝひゝ不堪ゝゝ
或秘 不達也又不堪

ゝゝも所りゝをゝのゝちゝひゝさ
ゝゝ所せゝうゝこゝゝども所ゝう
ゝゝゝ

○なく涙と　盃　右近なく　躰ハ一定死なと業
の名なれ也
○まくさんけう　弄　白宮の名をれうこと也なり
○せさあく　所ハと　河をなるる泪を袖ハ玉ハ我
ハせさあくとなるなせる名さハ
○我ハ心よりなをも　河いるなせるもいひくるれを
うさ物ハ身を心ともせわ世なりまう　後撰
○きをなくなる　世秋　わハうる身上なそ　ふ
ハさう同心やとさ不（ま）てとと思てなる（し）

るん　世のあどめうらいきこ有た
いさうのうるまうも作るあう
物をとて　おくさ海もいらでまれ
だいうあうとあとまぎれつる
ゆうこうもうせて　せさあく海
たず　まこの心　まいこうよりなをもま
うせど　こませうるうさ海はて
るまれうさ海るれば　知ぎつる
と知りふあうもい海ちくて
人のこうをくまぐくやさき
さ海よりて　かりてり　知ぎく
をとありのどめつすぐ

○とうこうよりなる　弄　浮舟の心をくるさわりて
芸をひくまるよりまうきんと

○まやうるよ　或秋　二方ハ心をくるやうる
不ハ白宮ハ心をまうるへく

○うくるよりてハ　盃　右近心さてハ白宮の名をく
うくまうくうくと

はうをとをうるよりんかー　弄　浮舟
こそおくくまくるくわうまれと
知ぎの道いまはくぞふいそぐと
知りつぐみ人のきうばこそわが
こやの海とよいつうあうそあう
きんさやうなふつまそやいとさ
そよ人のこうをまぐう弄
るれいかをよあのこそまうる
るげきよあをもうあの海
とるんありふをいへまるよ
なくくうとの海へぐくうにそ
いきあてぎれといくおくて

○いと心うきさま　万水　右近ノ羽也　ハ陳ノ〜れと
とたちのうちのあそ思案しと終ハきて好ん
しと見ハ有りのまゝよりて也

○とのゝ〜　細　右近ノ羽也

○岸乃やのゝ人は　孟　白宮の中君ハ〜ゝ
〜ゝ〜

○ゝのあや〜　細　東屋へ出ゝ也

○〜此二月ハ〜ゝ　花　正月ハ卯杖ハ椎ゝ中
君の若君へ宇治ゝりなりて此ゝの時ゝ白宮
ゝ〜ゝ也　或秘　白宮の宇治へなりて〜ゝ
ゝ〜ハ正月の末ゝ二月の始ゝ〜

○ゝ〜ゝ　孟　ハ返〜あれと右近ノ羽
ゝ

○ゝゝゝいん　巴按　芝の心定而如此ノさんとゝ
ての推量也

いとゝろうきこゝ
ろよりそい行ゝ
ゝゝ思案しゝ終ハきて好ん
しと見ハ有りのまゝよりて也

○とのゝ〜　細　右近ノ羽也

○岸乃やのゝ人は　孟　白宮の中君ハ〜ゝ
〜ゝ〜

○ゝのあや〜　細　東屋へ出ゝ也

○〜此二月ハ〜ゝ　花　正月ハ卯杖ハ椎ゝ中
君の若君へ宇治ゝりなりて此ゝの時ゝ白宮
ゝ〜ゝ也　或秘　白宮の宇治へなりて〜ゝ
ゝ〜ハ正月の末ゝ二月の始ゝ〜

○ゝ〜ゝ　孟　ハ返〜あれと右近ノ羽
ゝ

○ゝゝゝいん　巴按　芝の心定而如此ノさんとゝ
ての推量也

○ろかいを　盃　盞の義なれども只もてあそぶこそ
浮舟の入水をもいふなり
○あさうもう　万水　愚癡なる心也

○ゆき谷をを　河　古今　世中のうきよりひとつ方
をもをハゆき谷にそあらくるうるわ
細　都なるよをまハ入水なるの只なるハあら
ずしきりのなり

○年ごろ衰し　或抄　宇治のなり也

○人なるとつを　花　人形ハ水よりなるとなりの也

○ろあやまち　或抄　宇治の世なるれなるあるもき
ろをあやまちなり

○後のうしろえ　細　葬送なるしろくしくせ
と只ひかるる世なるをきてとなるなると只なる也

でくとちあがあてしやとあがに
くわれと思ひしきこそても
ほど方をとまずふをろわ番
をぎりまるかぐふいとあきるも
ものふくろるぎあうしん
すてこのかのちうきをたなりて
うなりひとるあ光んうしまるて
よきとあちすあざるまうば
いとぐうきをよあもいぐで
うるるずあうきうにをもかあ
いそまぐいとぐうきうの変
ひとるあと・州川のうとまるぐ

ていうう年ごろあくれと
思りひとあてうるておうき
ゆぐをゆきうしも今ひ又
うるうるうてこのほのるをに
もえまるまぐきうるうる
えのうへのまひまぐひ人
うるはをるあうしきゆし
るてぐぐわあやまちるしる
つるんあうるうしりそれのる
るのるをうるびうるぐるて
ほのうるるもいるあやしるる
るぐるてるふしうるあうるれ

○さいうの人は　或抄　常陸かの小方うちいはるるんいるあまりてんさいぐりの人のうちとはをれうの浮舟そありしと

○ちひさうるはい　細　白宮のうちとはうちとはいはるまいしと

母はうるまいしと

○我ゆうるよ　或抄　廿二宮のうちをうちいやせんと

えちうでいづゆりはいうるのあうまうるんうあどうはうんあどうろづよいとあーく

はづとどうちひとうの事はあるまいまれどはとものあもはおのづはうでは事のまうづを

めてばまどのまつよづあはうまうもはんどうーうれいはいとあげさ

ゆうどはりのつうをうちうくはて

はうるんいうあまうるんさいぐりの人のうちとはをれうの浮舟そありしと

○ちひさうるはい　細　白宮のうちとはうちとはいはるまいしと

母はうるまいしと

○我ゆうるよ　或抄　廿二宮のうちをうちいやせんと

○ちうひいと　或抄　死骸を殿中よりいれはうはいはるまいしとうされと供の人も不審せんうるはは座中へはいはるんは也

巴抄　必定死うるはは不知うるや

○はは車のうちを　或抄　車の襠よりうるあうはうもはは也

○昔をあまりうも　河　万葉　ゆりの青根の嵩のこをはいうるはうをもんうそあきうよ

○今はうをを　孟　荘の心也

○我を又哥　荘也　孟　我さんうをはきてはうるあうるうあるまはいはるはやうきのうはとあのもんあうはは今は律師ぐまうかーてこのはは事のうをとうそうを也はは今伝の傍のうはうあはは女きをうをうはうはいとぬうんかうはうはは女はうはうはは事をうはとはうは事を自うは種佛仏養

○はは四法事　或抄　浮舟の中陰の法事也

○はうはいとはうはうは　河　観経　如溺水之人急須備救岸上之人何用済為　又自害者殺生之随一也うと

○わまもりハ　盃　浮舟のまもりハ人ゝし物ゝ

○いとゝ　或抄　弁尼　芝の山返る也

○うねり〳〵　河　世をいとゝ思のもとゝなるゝ
れハうねりをわのあきれきね也

○とくむ人とり　或抄　芝の山

○いつきのをれうせ　河うせとハむるすゝき瀬也
うせ貝るしいて
花　うせハうせ貝也八雲抄ゝ浦民とひれ
ゝ河海よハうせハむるすゝき瀬とうれうおゝる

○子うむゝ　或抄　少将の妻也

○きいの家ゝも　弄きれうゝそ常陸家よ
とゆゝる也

○又これも　盃　浮舟のるれうゝよいゝと母ゝ
ゝいつきと産平安也

○ゆゝしきれハ花　いまゝしき多れハうゝ
ゝ不へゝもえゝゝゝ也

○のろのくの　孟　浮舟のうきたるそのうれ
ふとをろすもあるしぬ也

○あさましきるハ　細　蓋文の羽

○まいていうろ　巴扱　ふと只道のやうな也
河　人の家のこころハやうなるねしまと只
ろちよまいしいろる

まれバえうぶのうのんぐ
うもばぐどあまきまぐひく
ろとるおるぐのうゆつひ出
びてわうのばぐんこうもも
いとうまてくわうれるうおさ
きしいまづきこんとおりひ
ばへてどうものどもうぶ皆
くくきこうてまていうろ
やこうまようまこおんとうの
ぐをすぐつうまくうかて
月じんもへまうこうをんうの
つひまもいうぐおりひのどん

○るうう名残とハ　或扱　蓋を浮舟のうろうと
うきよくく

○大蔵の大輔　孟　仲信也

○心のくうる　細　口まそ也使うもの名くる也

○心さくあうやうハ　或扱　行未すくと心のくう
いで心さくとうろくさうしくく

くうくくのこ行うを御りひのうう
ままうぐくへばげぐみあうとハ
うるくぶううぶまこうもうぐひ
ばへうぐどこうまうこうおりひく
いくくひのうのうのうの大輔を
ぐくまくうくうくのぐうふ
ううづを御りひくぐどうよ
きうのうまううぐうのぐずも
こううぐわうやうようん御ち
ぐうをんぐきまぐいまのぐうのう
るのぐどよくまてもうみうぐ
ふうもれまこくじゃこうゆく。

○あさるさんとり　細　常陸守のこと也

○くしも　細　使とりひあそこら也

○ろくしきすよ　盂　冊のゆ返るの約也

○うろ物せて　巴抄　まくは使るてあんとハ
ちくとうろうとを待つをんとそのあり
○年ろハ　細　宇治よりうちをそとをろ也

とくんきねどありひをまきはく
おさるのをんくりわるをぬか
やをとつくもろんすもうあが
うろをあのくるんあどとだ
ものはつくもいひ
まくをもくひるれくもも
ふをはくるひなして
せあてうびをうはうあく
かくあくをきをるれ
はくのうちをうくあり
くをんるびをはくるんあ

○うくをるさ一て　細　あくをうてをんるを

○さくの名りも　花　是も里の名うりを心也

○めのまくろ　盂　行未ハさのりきるをとをも
まつ目のゆくれるをくを

○あるみ心ちも　万水　たりさるゝ使うれハ備足せゝ
心ちのせんと母の心也
○うの君ゝ　細　浮舟ゝ　ちゝ　せて大将ゝ　せん
と心さしゝ　ゝ　ゝ　

○さて人さま　或拶　門さへあれハ平人ようさせる人を寵愛とる類多あること

○ふるのそうすの　或拶　浮舟を本堂なるものやうよりこゝ〳〵ハのそうすの行さうと也妻うそ有つさハ也

○ふを冊ゆうハ　或拶　浮舟ゆへうそうとは

ひとあらてまつどやいある。
うきはさるぶきてうきあ
あがさんとがんのうるぶ
うんぐんつるあゆ　さ安せる
うこうあどとりあたぐ
ひゆうのうあひとあるう
うこんのひかさいも　つが
ゆてかーかうきはをぐく
あうあうこばこいあうあどう
のことをいうぐはあてあのん
栄のうろはがをこのうこん
ゆうぐこうあれこゆうひう

○さうるうこさて　巴拶　中方の殿内のうさて也

○くてのゆうへる　万水　世の産れ知りゆ世の殿内
ふゆを守る腰立なるこし

○年ふうるうこよ　細　浮舟の在所也

○京ふるて　孟　京へ恙のれとあてうこ
〳〵ふひ〳〵〳〵

だうりのうこいうかるがんうこべ
きまこしあがとぐこあいうう
ちうこうあうぐうこてゆうこ
うこてゆうまつうこかどうぐ。
うこういうぐるんあうこうあど
あうのまうゆもうこぐうれば。
ううるうさ海こてゆうこまん
かどもいんうまんのうこかいぐ
あうてかどうこんこゆうう
かどはどがうまはうこんも
あうかてかしさ海ゆうこう

○ちゝ人くりて　細　世常陸守權門上簡うしとひと
うしく忠心のある人也
或抄　世ちゝこてハなゝゝ心也　畏神（カしこキかミ）　日本紀

○ひとめそさき　或抄　茗の文とうちくしく人
てかくりて羽也

○をのれもしの人　万水　守も茗の家礼ハ者ゝれ
ゝを近くハめしもつゝくと茗ハ忠ゝゝ心也

○まして　万水　毋君手習のゆとゝり

○ゆゝ世ゝ世ゝ　細　茗の心也浮舟ハ存生ハ毋
のゝ人文ゝゝとつゝハれゝゝ

○人のゝゝ　弄人のゝゝゝと尋ねて

○いくゝゝん　或抄　浮舟生死ハ定ハゝゝ也

○ゝゝもゝて　弄　浮舟の身体ハゝもゝくもあゝ
世法ゆのゆハ浮舟ハゝ罪得ゝゝゝ

ゝるゝのゝゝゝゝもゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○六十僧の　河　六波羅寄り八六道よりあくをとるとこ
ろ　花　三代實録曰貞觀十五年七月五日
辛未延六十僧於紫震殿限以三日轉讀大般若
經　此外六十僧をめと例多し皆大般若轉讀の
ことわり也又は中陰の佛事に六十僧請ぜらるる定
例也七僧も六十僧の中よりあくさ也

○いそくうん　或抄　右近ゑ志よりの分ゑと云也

つくうもうさとるれどいとも
ひてうのまてしてそもん
ひさを拾ひろ　二千俵乃為也大
よとそてくせてうたくさも
きおてこくもろうこや
ろいの宮也がりふもろねの
つがよこいまてくまてくん
ん　ひくうおわさかる
つざいえ　拾ひばうんがうろ
さまてきりれいこるさ
わんいてくちんなどいひ
もろのくんもいまくさ

○ふそと　万水　四十九日ゑくん

○ひさちれさそ　弄　字治へさくろ也

○あくくり　也抄　享主めく也

○女將の　或抄　女將の妻は産よいりきもし
ともくく　此法事の為ひくろも不及と常陸の心也

○りろうちさの　河　万葉十五　新羅（レラキ）へくいくる
くろひさの鳴ゆくくくくもひりひつを

わまくはまうあやくをも
四ぎりはくんのそくある
そ也拾れるんと参はくく
くんのこあるよひちはくと
きくくくもあくあるくり
をるかるんあやとくへくん
もろ女將のとうま也ていろ
きこと四ちんとまどひいる
のちよなきものはくあく
りろうもくを乃ぎうを日
しつべきふぎうわまいくわ
やくくこのれるしあひ

○いさゝゝ　万水　手習存命なるハとも

○あやのうへも　或抄　中君なり也
花　七僧のまへハ僧食のなり也七僧法會八四十九日よ
りこなる也　講師　讀師　呪願　三礼　唄　散華
堂達　これを七僧といふ也

○宮ようこまり　細　廿二宮なりてと也

○ゆうりのへ乃　花　白宮と芦大將とゆうゝゝ
浮舟のなをとれ給ハぬる也

○ゆうりのさゝり　或抄　白宮のなり也浮舟と宮笑
の最中よりなりて也
○あさうるはしのハ　細　白宮也いとなるなりそうゝ
さむゝさゝとなりを色好のゝさゝとなり

○みとのハ　細　芦也ゝゝそゆうりの心ゝなゝ

○后宮のはきやうゆく　花　明石中宮も式部卿のなり
よ輕服よりなり也
○うゝてなゝ　細　六条院よりなゝゝ

○二のなゝ乃　花　白宮のはらのゝと也式部卿の國
よ入給也

○世をやハ　弄　白宮也

○よさ人乃　細　一品宮のあるりし物なりさまも也

○小宰相の君　花　芝の宮ひてるひ給ふ小宰相君を一品宮乃めしつひ給也

○つまとと　細　琴琵琶なるへし

てつのもまつ物ぞとこのやハさりぐしくものわれぬるまるよ一品乃えれ世方をあくさめどろつよしかまつ人のうちをえまかてり見給ハぬ物わろ出るどのかしこ宰相乃ことをとへ人のうちをもきこゆ。ろうぢ世をうの人とおがされうおがとうこあるすはまとだち乃をとも人うへまうあをを

○世宮もとうろ　花　白宮も世人とうるとをひ給ふる也ひてさとハねうこき心也芝よ志さしなきとねうこ見給ひていひあるをもうれしく見給也

○きいろいひやなり　弄　白宮の小宰相よ芝ひるとをいひやなり給也

○るうこうさしも　弄　小宰相ゝ心也芝よるうへてるゝ白宮よいるひさちんと見也

○まあ人ハ花　芝也小宰相の白宮よ心つうきをと人よとられうと芝の見給也浮舟君よ見給ふ也

○うゝ物なれ　花　芝の浮舟ひるとるをさ給とうへて小宰相のやて付る也

○衰しろ哥　小宰相也　細　世の衰ハ人よとられねとをとるうさるゆ人よとんさろしと

うさねうちいひうちもうしをとうをんうつうろこのうやもうぢろいうさうものうしてきいのいのやづうこうものうしなどうさうもやづうしどふしハわんとうろつづう給ふ也

ろうをるをあんいとうしんうハうことあうしあるとうをんあうきうくものあるうさ海をうんうをきれがしのびあうてきこうろ

衰しろうハ人よとられね

○人〻ハと　河　浮舟君のみを大將殿のきこえ給ふ
をとゝして小宰相君我身よりハといつるゝ若又古
哥ハ可勘　細　ものゝよりさきのをとゝ
〻ハと云心也引哥無之正徹室町殿の御物
語と講尺の時引哥なきよしをゝせよ慈照院
殿の御物せよ云後撰哥よ　草枕紅葉也ろよ久
〻心とゝ〻ものゝまゝやといつる哥可然之由申
ハ月也可然之由申〻
○常なりと哥　芝也　細　世間の無常ハ〻ゝ
を人のゝ〻〻さかとゝるをくるゝハるさをとゝ
〻ゝてゝゝねゝゝゝわゝゝと　青表紙ハつきぬ
とあり是可然乞世間をつきるゝ〻ゝるゝて吾ゝ
我身也
○世よゝゝこひ　花　小宰相のゝゝひ九月をゝゝこひ
ゝゝ也
○いとゝゝゝゝゝよ　細　芝の多也平生をゝゝさ人
ゝゝゝ

○人〻ゝを　弄　小宰相可然人とゝゝゝ
或秋　世人〻の羽八上下へゝをゝて人〻さゝや

○ひきてゝ　河　甲下

○ゝゝ人〻ゝゝ　花　ゝ人とハ浮舟君をいふ也

○ゝゝゝゝ花　出ゝゝをんハゝやつ人よ生ゝゝ
ゝ也といゝゝゝハ我ゝゝよゝゝゝし物ゝゝ
○人ゝゝゝゝ　花　芝のゝゝゝゝゝハゝゝゝ
ゝゝ也

やしごとなきよりものゝゝふ
きゝゝゝゝゝ

○はくうせう　花　中宮のはハ講也
細　隻よりる也此巻色くのるをうきゝて行心ハ
其ゝの此ゝひやるくさむとあるさこるくゝ行
義をゝ人せゝる也　弄　六条院ゝそ此るくし

○五巻の日　細　薪の行道の日也

○五日とゝ　細　五日十座のはハ講也
或秘世の常ハ八講ハ法華経と一日ゝ二座つ行
て四日間経結経二巻とそゆゝと十座の八講とゝて
五日行ゝる也
○小のひさゝ　細　寢殿の北面也東ハ道場ゝ
るゝゝゝ西ゝゝ行也

○ひやうゝや　花　一品宮のる
○物ゝゝゝして　花　ゝゝハ困也えんの声とゝ
とゝゝ也物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ心也

○るゝゝゝゝて　細　八講の時ハ束帯也直衣
ゝゝ行也

○ゝゝゝ　弄　小宰相ゝ
或抄　ゝゝゝ小宰相君のゝゝ可然ゝとゝゝゝ仍て
ゝゝゝゝゝゝ

○うへ局　或抄　禁中にて八直廬をうへ局とも
いふ　うちうへのやとも家をうへし
○うちやうの人　巴抄　小宰相やうの人とも

○例さやうの人　巴抄　一品宮の座のゆへ也

○いとものゆかさ　河海　日本紀仁徳天皇六十二年甲戌吾
氷室之溫觴を引略之　河海　委
花　延喜式全氷式　日九供氷者起四月一日盡九日
廿日其四九月日別一駄　又八顆為駄准一石五斗八月
二駄四顆六七月三駄　又日九供中宮氷者五八月日四
顆六七月六顆　今案氷物八六七月の暑き時八加増
なりとて　河海　司より是と奉也　今物語ないろハ中宮

なりの氷なるへし
○うへさかをを　弄　暑き日なれハ必不礼の躰とあり
しーうや
○白きうちもの　花　是八一品宮のる也

○うへのうへふ　五氷　人くの氷とをとる也

○うへらとき人と　或抄　茎の取よき人とあり
見集　人とも一氷宮のやうなるハいまとをとも

しそくうらやもしうへはかはよ
しうとうとやわうんのまの
のをとすると物てやうう
乃うとうきしのかうくわさ
しらうやをとうへくまへいい
はやうの人のあうもうひうハ
うどをもじくしううひれ
ぐうくきてどのうてちぐ
しらわうひうんとをれく
わうのあう　をとあくうう
をきてひうてをうてさうぐ
はうふうんぐうひうかう

○まことよつちるもの　河　顔花右前後粉色如空　長恨歌

○きうるもしの　弄　上萬〻〻〻心さ〻

及小宰相ゆ〻し

○中くものあつひよ　花　氷とそ〻〻よ宰相君の三

詞也

○ゆあ〻〻とそ〻〻と　弄　〻〻の次ゆ不〻〻

〻〻ゆ女宮ハ〻〻よ不及きを〻〻次よ小宰相ゆ〻〻

〻〻ゆ又〻〻〻〻〻〻きるとゆのあ〻きハ〻れ

〻〻次と〻〻〻〻又下〻〻女房のさ〻〻さて〻〻

朱よさ〻〻〻〻中〻〻〻の四重よ〻〻〻〻

○此人ハ　孟　小宰相也

○のこ〻也　巴歌　京〻〻

○いゆ〻〻し　孟　廿一宮の詞也

ぎうくうと　巴歌　ゆ〻〻〻〻ハ

まことふたちあ〻のこ〻ちぎま

を　巴歌　ひ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

すしのひ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

きうくのあ〻〻〻〻〻〻〻〻〻

あ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

てあ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻

○此さうし八 盃 障子のあさてありしを下臈の
女房のはさくとしらる也そもそも人の心をも
よく也よく心得へし
花 とゝのゝハいろ〳〵きこゆるゆゑにて障子を
引ゝそもて扇へ引ゝくろと云也

○此るをゝとゝさ 或抄 萱草と名付てされハそ
とゝひ物とゝさゝる也

てこの花をうしなひぞにさるぞう
けるものをいふなり此佛のうる
はりを世俗つらん 萱草のやを
うどゝの物をうとんとゝるや
あんとゝうつゝぐふくまり
うちうなぐふるこの心ハ
きこゆりてゝ涙をうるうちう
女房のいさゝぐかとゝのてゝて
わをあぐやうをおりひ
いぐゝ人もてゝ人をてゝとバ
うれゝゆりのれぶまぐひう
うるをゝすぐをうるう

○それもアラし 或抄 萱草の遠慮也

○花の大なる君ゝち 細々霧のれ子ゝちるゝ人し
弄 萱草ゝゝうゝ人ゝ人るれゝゝ常ゝゝれ
ゆゝる人ゝそゝ人ゝゝちゝゝゝよゝそ也

○ひゝ人ゝゝゝゝ 花 萱のゝゝゝ直衣ゝゝを
いゝゝひゝ人ゝ袴ゝゝゝれいゝやゝゝゝ

れゝるんゝゝゝゝゝぐく
ゝのゝゝ四人ゝゝもゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝれゝも人ゝゝ
まぐゝゝまゝゝゝゝゝ
てゝゝまゝゝ このゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ川ゝてゝゝゝ人ゝ人ゝ
ゝちゝゝんゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きこつをおろかなるやうにおもひ

○おいこうして　或抄　世の人々たしなむ也

○この人は　孟　芝の道心と一なりこうてやうよ

物おもふ

或抄　宮治の大君は心とろう一なり也

そなもすこしあうこと人こ
ろうへのはとどこあれば人も
えんきこつを治とつるんうこ
ずりひごじてやうの人はやく
ひじまふなりこころをたな
ふこどもとて海ぐなるあ
ずりんともなりかうのこと
世とろひさあまこうぶまは
あるさひは世こそこく
こころんこまやいかどゆり
つらるもやとうこどおどて年
どろんこまつぶやとひんん

○中くくくく

○あるさよ　細　廿三宮也
○大貳よ　弄　廿三宮のれ方れ廿房まるくし
ひくへのれそ　花　一条宮のさるるれひくとまよ
ひるへ少也
○あまへるるへハ　盂　廿二宮とれ家家ちるとるる
るるハちへ也

○例のわんと　細　芸也
○ひつるさ　或抜　廿二宮のれるへ芸ちるひる
○ちそこハ　万水　芸の約也
○へあるくるる　細　人のとへまるねこの生
ちそハるるるしる
○るるるくよ　花　傍側也　ものくるるる姿
とるへ也

○あへけるへ　花　敢付るへ也人のるあ家そふ
ちさひくへるるとあくてさるへさるるくるね心也
或抜　あへハ県敢定断の心也　定定の心ニ
○れくるちと　花　是も廿二宮のれちそとる也
○れるるの多さちそ　花　れるるるるくちそよい
ちるるるとる也

○ひりて　弄　昨日廿二宮の氷とりてあるひる
一次の日也
○るりていろ　花　是も小宰相君の氷を一条
宮よりるるるとれ出て芸れちるひる也
○忘よるさて　弄　漢皇李夫人のるるるるし
或抜　芸の心也

○ちりてこれハ　或抜　一条宮廿二宮れ兄弟るれ之
るるるね一本るちるるね

おりそれておるるるのまるて
たるるるものるるへのれるる
わるりてまるまるるとのるへ
おまへるるへいこのれるるのる
じるるりるおりまるるて
るやまるるるへるるるるへ
ヨ・まいの会稿しれるるるよ
おりちるるるるるるるる
れるまびのれるるるるるる
ちりるるるるるるるる
るれるるるるるるるる
わへれるるるるるるる
ものるるるいるるるるるる

しで今ハあへけるへるるるるるる
るるるるるるるるるる
日のおるるるるるるるる
のおるるるるるるるる
いるるるるるるるるる
るるるるるるるるる
世れるるるるるるるる
しれるるるるるるるる
ようるるるるるるるる
やるるるるるるるる
りへるるるるるるる
るるるるるるるるる

○一ふのあやよ　細　芝のくひ所也
　弁　一ふ宮の文うさをゆゝしく所作芝の心也
○うちよあり　盃　廿二宮の返答也

○こゝ人よ　或抄　芝の羽

○大あやの　細　明石中宮也

○いくらう人　細　廿二宮の羽

○きとよう　細　芝のくよ〳〵

わが心よまろせて人をまもりうばゝ
あがゆよ心ともあるどちをぎれ
わ一ふ文よ出文をすりあやしやすし
ふくべうちよあり　しきう人のさ
のあるうばはすしうどびさく
ともあるずとのくまぶどんよ
かくをあるまりてわれう
もきこくをあるまそいん
うるわれ今あるあるおまそて
うくきまりしきをあるあるとい
きんとのくまぶどうくきこん
うくてとのくまぶどうあるう

○あるゝ　或抄　廿二宮の出方ともとゝつき
あるくみとりさんゝ

○例の宮と　花　白宮のゝ也

○丁子よ　河　西宮左大臣六月の比丁子染の帷
と着〳〵あるゝ　日記よりくゝう
花　丁子染のひくゝひ芝着り河海よりくう
こくやくゝ直衣ゝハ芝の直衣ゝさ花田よりあ
ゝ心ゝや今年白宮ハ廿五歳ハくよ成あるゝ也

○あるやせ　或抄　浮舟のゝひよやせあるゝ也
○あるゝあるゝ　弁　白宮の廿一宮よ似あるゝ也

まくうそ　おゝ　そすあるうう
とうくまこいはゝくうくまうしいと
これいきくうしわくのくまくうの
月ハくくてきこのわくこあるい
こやよまくうあるこのよもあう
くうゝ　ゝよあくくうくうくうあ和
のひくくとゝやくあるゝをよ
きくまくあるいくこのくまゝどあう
かのあるくうのあゝくうくうしみ
やくゝゝくうくきくくそをを
あくくしくうハあるくくをくまくう
いくくうくいくゝあるゝゝあるゝ

○ゑとといとあり　花　白宮の持参所

○あるさまにまいりて　弄　一条宮のけりうの人也

○これもまいりて　或拾　白宮と一条宮の方へ渡所也

○大将もらく　細　中宮のあるの人也

○のうらうらゑ　或拾　一条宮へまいりてせれらのうら
中宮のあるへよりあるとの葉の人所也
○此里よりのし所　花　廿二宮れけりの也上の羽夫
宮のあるへそうらうあるんとありうらうしてとり
所なり

ところもまづらひさをいと
あるまでさこしづひらぐぐ
ちらしうつらうきを繕をいと
なくらうをてまうる所へ折
世房してあるまるまいて四所
てどももとうを四所お舞
ちうまいうう所て所八うう
のううう作りてぶうへの
か事をうきうつのうら
作人所いでおこのさふ
あり所人をのうのうあれ
て参ひうう所つうをうく

○ちるさまり　万水　廿二宮しうへの葉れけり方より成
所なりとの所なり

○やうのうの　花　給ううとうう也

○ちるようう　弄　葉のりてけりううく廿二宮曲も
なくうひ所へ廿一宮ちうまいりて所へうう

○あやし　細　中宮のけり羽也

○ちうくよ　或拾　廿二宮葉への方へけりうまして
へうてうまいはうのけりけりうり疎遠よるう初

人所人をひあうえ作御ちうう
所をうちうこも作ゑをとうくふ
さうまう所つるよ参りけてを也
所つるやうよ参りしてうへのうを
をうきのうを作りをゑ本のりの所
どもうの也きを所いうん所
が参りてをそまうへんうう所ひ
も作りううこうきうう所へ弟
しくふうをうをてきうう所へん
ちうをいちうちうをつまを
ちうくきをううへうきをう
しをうをちうくふをうり所ひし

[illegible]

○[illegible]も 万水 廿二宮[illegible]ハ何[illegible]も一不宮へ
文をもつて[illegible]也
○[illegible]ハ 弄 [illegible]の羽
○[illegible]也
[illegible]の宝[illegible]ハ[illegible]ゆ[illegible]也
[illegible]

○[illegible]も 盃 [illegible]ハ細[illegible]也

○[illegible] 花 一不宮と[illegible]の[illegible]也

○一夜の心[illegible]の 花 小宰相君の[illegible]也
○[illegible]と 弄 ハ講の後廿一宮と[illegible]
方の[illegible]也

○[illegible] 盃 廿一宮の出方へ也

○[illegible]と 或拾 廿一宮の出方の[illegible]の心也
一説 [illegible]の扨[illegible]

○大[illegible]ハ 細 [illegible]の羽
○此[illegible]の 弄 廿一宮の物[illegible]も[illegible]
[illegible]也 或拾 一説 廿一宮[illegible]廿房

[illegible]

衣笠とゝ[illegible]

○ありつゝとゝ 或物 似合ハぬとゝ[illegible]

○とゝのさんゝち 花 夕霧左大臣ハ君達也

○今とゝ[illegible] 細 女房達の詞也

○世中の物[illegible] 万水 衣笠の女一宮ゑ下心ゆれハ常
よりハうゑ心[illegible]

[illegible]

○姫宮ハ[illegible]ゑ 花 一品宮ハ中宮の御方[illegible]也

○大将の[illegible]ゑ 細 明石中宮の女一宮[illegible]詞

○[illegible]ゑ 細 姫宮の御[illegible]也

○小宰相の君ゑ 弄 大納言[illegible]上臈の[illegible]詞也

○まゝ人の 細 中宮の詞

○[illegible] 花 中宮と衣笠大将と兄弟の[illegible]也

[illegible]

○人うの心ちせ　細大納言の君
弄　葵の小宰相の心ちせ　ゆうすゝ

○きいのやうれう　或拗　葵　八世の帝　好色人のやう
よ　小宰相　もとゝあつまるやゝ
○宮とゝいと　花　白宮の浮舟也　情　あつまる
ゝもて　小宰相君のれいとゝもよりさわゝ

○又やもりゝ　弄　中宮也
○いゝ又ゝ　弄　白宮の浮舟　或拗　中宮君

○いとゝあやしき　細　大納言あつまるもよりゝ也
或拗　浮舟の浮舟

○宮のれ二条院　花　白宮の御方　中君の御ゝと　浮舟
君の浮舟也

○あゝゝと母ゝと　花　浮舟君の祖母ゝと　又母ゝと
人のゝ也

○又やゝと　盃　白宮の浮舟　ようひ　ゆゝ也

ゆゝまとおりのゝゝ　ゝれ　ゝれいでゝる　ゝ　ゝ
ゝれいでゝる　ゝ　ゝ　ゝ
ゝんゝづゝやゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　

○あやしき事 或抄 是ひしら鮫なる也

○女七宮と 孟 浮舟も白宮とよひまいらせたるなり

○くやしい 花 中宮とよ也

おなじさまなるよりもしなのなかの
そまりのあるつのごとくに
しらなみのかどよりもも
いとしのびておもひまなびて
えいなしとまはずあやしき海
よは馬なりしなれてそ海
らせおもるぞんかもうをやひ
きこしきなりやまろふきて
うをよりろをあるぞうるあり
そこそかのこやうのんども
ふるまひはしたるもしたる
こやもいとわきまへしあるべく

○これらさうなるハ 万水 大宮の羽也

○さハうめつく 孟 これハめつらしきなれハ人の
とくとうるさんと

○宇治のそうハ 孟 八宮の二類ハ短命なるとハう
蓋ハ此うの羽也

○いさやもとハ 細 大納言羽也

○うしこよ侍りもの 弄 小宰相うれしくよろこ
ーと 常陸守のもの下童也 宇治はあるし
下童ハ私世義可然也
○小宰相くさとよ 弄 さうなるハあるもの

○ゐなかびたるやうなり　弄　ゐなかびたる也

○さてくくしく八　或抄　浮舟のゐなかびたるやうなる　花　中宮の引也又ゐなかびたる也

○さてくくしく八　或抄　白宮のゐなかびたる也好色にて田舎ものとなるべしとなり

○ゐなかびたるやうなり　花　中宮の引也又ゐなかびたる也

○ゐなかびたる　或抄　白宮のゐなかびたる也好色にて田舎ものとなるべしとなり

○ゐてきたるやうなり　弄　ゐなかびたる也

○ゐてきたるやうなり　細　蕊の心也

○大宮もなすせ　弄　廿二宮より廿三宮へまゐらせたる也

○大將のうちまきり　弄　蕊よりうちまきりて給へと多くまゐらせたる也

或抄　まきりうちまきりとは廿二宮の西遊

○芹川の大將　河　古物語に水原抄　遠君とうつし或十君とし此一帖行成卿自筆本と又行しく芹川の中將とありき　下略

花　蕊大將の今廿二宮おもをもるようにていとうつくしき

弄　此物語今の世よりてうとさるるようにてあり

遠君十君いつれとそれも大將の息と又ゆ

○出ていき　弄　憑ちまきりいるしてしてるるて

ようでまうでまきりうちまきりうちまきりいでたるやうなるいとうつくしくてあるやうにてあるとしてあるとしてあるとし

○ちゝとうあり　弄　物語の廿一宮乃るひさじ
ゆゝしきあり

○萩のえだ　哥　芝也　心明也

○ゝさてもゝ人　敢物　廿一宮へまゐる名ゝ　哥　芝
ゝ人とやとも

○物とゝひくの　弄　物とゝひくゝて八字治のわゝ君の
ゆゝとゝとゝひ出ゝ侍也

○ゝさはゝ人　盃　大君のありとさうゝしゝゝ八女
二宮とも侍ゝゝ　ゝさはゝ人

○ゝしひわゝる　万水　大君宇治よりゝまゐりゝゝ八
ゝゝとゝていて

○ゝゝ人やのゝ人ゝ　細　中君のゝゝ也

ゝゝゝ

○あさましくて　細　浮舟也

○ものもとき　或抄　芝の白宮にすみときてたきものの
ありてはこゆるともものとしいひしは浮舟
のうきさまをとりとりと右近のかたりしと見えたり

○あるりうの　万水物りしくハすく岸きき
くこしの人まそのんとはよはらしくこしの人と
らしくあんとれハ白宮もうしむまーゝ手習の
ととをとりてとうとをとうゆよりやうよ
不慮のうも出来ることゝ

のさつぎのハおく海ーゝ元也
まーゝのいとこゝろあきおくどで
ゝうゝ所のゝくゝゝゝゝぐー
さをバおりひあぐーまずあい
ゝでゝもををりいゝをんを
ゝぐゝさきていあぐどこゝろ
ゝゆゝあどこーづてゝゝう
きんゝうゝ海をきこをーもひ
いでゝもつおりうゝゝゝゝ
でゝぐゝゝやすゝゝゝゝさ
らひべゝておゝきんとおりひ
ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝ　或抄　白宮と浮舟とのゝ也ゝゝゝ
の心也心ゝのゝもれハゝゝゝくゝゝゝゝん
うのゝゝ也形見と云説もあり

○ゝいのゝゝ　孟　中君と浮舟と兄弟なれとゝ
一度ゝゝゝ也

○ゝゝゝ　或抄　芝の我ゝゝゝゝゝ
或抄　世の常ゝゝゝゝゝ油断ゝゝゝゝゝゝ也

○心のゝゝゝ　細　草子地也芝のゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝそゝもばゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○うこゝろあるし　孟　とゝめて侍従とゝのへてうこんゝゝゝ

○[illegible]　万水　侍従中宮のえんとも
[illegible]

○[illegible]　或拙　[illegible]　浮舟の[illegible]と
[illegible]

○[illegible]　或拙　歴この姫君[illegible]中宮へ[illegible]
つ[illegible]

○[illegible]と　或拙　[illegible]の式[illegible]の姫君
[illegible]

○[illegible]　弄　浮舟に似[illegible]

○[illegible]　花　蜻蛉式部卿の四世

○[illegible]の　弄　式部卿の[illegible]方[illegible]の右馬[illegible]
[illegible]

○[illegible]　万水　大宮の[illegible]

○ゆきつらの侍從　弄　蜻蛉式部卿の息ゝ侍從也
宮の君とゝ　ゝ　ゝ　

○此院より西へ　弄　中宮女一宮なり　六条院より西へ
ゆき時のなりとい　源氏の四後六条院より北へ
住給やう　以前巻より
孟六条院より北へ住給やうは初めわたり

○花のあかいとの　弄　夕霧の大臣なり也　源氏の四時
なり　なり　すし

○いとなりこつなり　或抄　夕霧は中宮を四駿走
なり　也

○はるかう　或抄　源氏の四子孫繁昌也

○此宮色いろ　弄　白宮なり

○こうなりこつなり　或抄　浮舟のなりこと少
色　しこ　心のこつなり　源氏なりやうなり

○あやの君より　万水　白宮の好色なりのこと

○あやうちよりなり　弄　明石中宮なり

○こなたのこと　巴抄　六条院の紅葉也

ものがしこつなりつぐかれ
ぬ　ひつ　人なりこと　なり
えなりて　この院のあり　ます
をなりなりもひろくなり
くまこのかてつ
しもさこなりこ人なりこ
ちこをなりこなりくなり
なふいどもなりつどのなり
こうた殿しのなりこ
なりこ　こなりかく
いなりこつなりこなりく
なりこなれなりく

いなり人なりもいまなりこ
まこなりてこなんなりこと
えこいのなりこなりこ月
のなりこいなりここ
をこいなりこなりこ
まなりて人なりこ
なりこなりこなりこ
こなりここのなりこ
なれこなりこなりこ
なりこなりこなりこ
こなりこなりこ
こなりこなりこ

○世々やそ　万水　白宮の遊ともそやの詞也

○ねたまるれ　細　白宮の心也

○いとさうも　或抄　中宮の世房ところもうと
しきれいくくちらる也

○例の二ところ　盃　白宮芸也

うんとうあそびつくさんべからと
とそびてとおまつはそびらら
まちのう水をあれ月をあぐ
てはあらびそそぐ芸ともも
いまあ一きれどこのあぐうる
まそびらとこうくくそびゆ
給あさゆへあかれてもあを
今えんとうとかのさ海ぬへ
るをあのさこらとこもいう
ちあそびしらるあそびて
うくこうゆうひあさものよ
こかおもひうきいのこうこう

○うの侍従ハ花　侍従の君白宮大将の二番のうの
詞くうとのそきて我浮舟の君ハ
○いつくしうもく盃　白宮芸いつもへるうとも浮
舟のうの詞ハうんものとと侍従の心也

○心うう　或抄　浮舟の君とうしうひ詞心とう
らわしく也

○宇治の山物ところ　細　侍従ところ詞也

○今一ところ　細　芸也

○ひとのきれ　細　侍従也芸ふうれる也

きうあておまつよおうする詞
ようの侍従いかのうのうまもう
よいづくこもくうてめでうさ
ゆうも女人ところ海ていふ
ぶのうも女もしわさ海くう
なくこうこうこうこうこうふ
なで人ふうのうこうの弟をを
てしうとぶうもいうる手なれば
こうこうこうよあうとしいて
なもふやうこぶのれりのぶこう
なで人こうやうきここ女人
ば今てこうこうこいでる海也

○ふくそとと　弄　浮舟の眼の中のゝ也

○るすようをを　盃　茎の訓也

○せこ　細　茎の自称也我こゝ心やとき人ハ
せこをあくまきこと

○そこへきて　或秘　女房ゝち茎とゝちてゝもく
ゝくもそるせハ人とあゝゝはやうとゝゝんと

つもきたすこゝ　ゝこゝ　ゝたそて
ともすこゝ　ゝこゝ　ゝあゝと
ゝたこゝてまつこゝ　ゝ　ゝ
ねひんこゝ　ゝこゝ　ゝ
ゝゝこゝ　ゝ　ゝ
ものこゝ　ゝ　ゝ
ゝおゝて　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ

○弁のおゝ　弄　女一宮の女房ゝその中よりとゝひ
ゝゝ人也

○そゝもゝ　弄　ゝきゝゝ
哥を河海よりゝ　弄　心相叶ハゝ人し此段を心えゝ
き訓也ゝゝ　茎よ返答の訓也茎をもつゝ
ゝゝさゝのゝき女房ゝゝゝゝゝ
ゝいゝ訓ゝ　耻ゝ仕ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○そのハさゝ　弄　大ゝさゝゝハゝゝゝ
房ゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝ　弄　弁ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝ　弄　弁ゝゝゝゝ
もせゝ茎よゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
弁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
花　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝ　弄　茎の訓弁ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
巴秘　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○うきぬハ　細　弄うゐ也

○心とるき　或抄　初秋のころれ分ろうよさきろ
花ゐろ人し　巴抄　何ととたゐ花ととゐ也

○うえハル帳の　或抄　人くの義也

○ととひきとうせて　万水　芝也

○廿鳥花哥　芝也　我賞法ゐるとこり廿よまーろ共
あさ名とーて浮そ心やとくハ四ととのあて
花　古今　廿鳥花ゐうるのくよやとうせハあやうゐ
あるの名をやとちゐん

○うーうとうとうく人　弄　誰ともゐ中将君とそあるみ
ーよととうーくうと

○いとく　孟　やそ返事とる也

○花といハ哥　弄　此返哥の心ハ花とゐ名ゐるれ
とゐくてのくよハるいーくとあり此哥ハあまり賞
ゐり艶ゐるゐるきうや

○とうとうとと　弄　とうあくとうとと足浮へろ
とうるれハうとうとと

○今まうのあり　細　まいんとせーくの芸ゐ道
とゐうをゐて居とうゐくー

○廿鳥花哥　芝也　我賞法ゐるとこり廿よまーろ共
あさ名とーて浮そ心やとくハ四ととのあて
花　古今　廿鳥花ゐうるのくよやとうせハあやうゐ
あるの名をやとちゐん

○うーうとうとうく人　弄　誰ともゐ中将君とそあるみ
ーよととうーくうと

○いとく　孟　やそ返事とる也

○花といハ哥　弄　此返哥の心ハ花とゐ名ゐるれ
とゐくてのくよハるいーくとあり此哥ハあまり賞
ゐり艶ゐるゐるきうや

○とうとうとと　弄　とうあくとうとと足浮へろ
とうるれハうとうとと

○今まうのあり　細　まいんとせーくの芸ゐ道
とゐうをゐて居とうゐくー

○きさやうの事　河　翁言　老人詞也
弄花といふの事をえんぎもとして甲下して翁
言ととなるもの　或抄一説萱の事のまといふ
○蘭ねして事　弄の物也　世抄これにて心尺
へは心のうつりゆくねはさて後定めれと
○宿るき八事　萱也　盃事よりこれいろ系る
○るふうくろ　細　萱の事といふ世ともをくる
しめ物ふと　弄ゥ羽也
○大きの野乃　弄　弄ゥ羽物ゆ向者ゆ
きわさけを理とつ弄へきるねは何とるくさうを
やうくろまて也といふ也花のまよ世その人みさうを
といふ也　借也く

○心る一道あを　花　萱の羽也
○ゆきてのの　弄　今その世房ともくちる事
さうれはくろへきりゆめ　ありゆ一やとの花也
○をうへてく　弄　弄ゥいくさうると世房のそう
ゆる也これもくそあるへさと　萱の事ゥ羽へさと心
うくゆる也

きさうをまてらみたるあさ
ことをとくとこのうまみもへは
のうきうを海ゆしくちを萱ゆ
きくくくろ　ゆくしくわを
とくるんゆをもてもの花也
ちのゆへるゆるはわるゆ　ゆ
よるわるて　ちゆいでまへは
ををゆくくのうあるんと
ゆりひゆるをくろをを
ゆりくへもわるゆんでるくろ
らんよをくうをて　ゆるをく
ゆるまくよ花のゆもくを

○うすくつゝて　河　大底四時心物苦就中暮　斷是秋天　白氏文集

○ありけるさねの　弄　さきよ草の物ゝひろ〻ゆ
人のる也

○宮のあゐ　弄　白宮のる

○ゐの中方乃　花　一ゐ宮の女房〻ち也

○るをとあやしの　弄　白宮ゐ〻ひゐよやそ女房
の名とこゝろ〻と草ゆ〻きすゝと也

まへの草ひ〻をとんさき法へ
もゆのこわくれなゐ〻ふ〻ふ
つゝくもゝろとゝあるふあさ
の玉ゝいふことをいとゝしのび
やゐずゝあ法ゝわゝゆゐ
きぬのをゝるひゝゝきをひ
ゝてゆやのさゝじゝわゝとゝて
あるゝこよ人ゝゝゝのあゐあ
てゝこゝゝわゝるゝこよまゝゝる
いゝゝとゝひ法へゝゝのゆゝゝ
のゆゐの玉んゝきゐあゝゝゝを
あゐゝ乃ゝゝやゝれよゝゝゐあ

○世乃やよ八　細　白宮ハ誰もゝゝをゝるれゝゐよ
ゝ

○ゐゝさをゝち物〻　花　さゝとハ羽也一ゐ宮の中方よ
草のゝゝゝくゝゝきるゝとゝゝゝゝの法ゝり
取枝一法世ゆゝゝとハ白宮ゝ好色のゝるよゝきゝて八
ねゝきゝゝゐゐゝゝあゝゝ

○いゝて世ゝゝゝゝゝと　花　草の玉ひ法やゝハ一ゐ宮の
中方よ宮のゝゝゝゐ玉法ゝて人ゝよゝゝひゝきゝて中
心をゝきハゝゝて玉ゝゝせゝゝゝゝゝゝゝゝゝ法也

みもゝゝあゝゝ人ゝよゝゝてかく
ゆゝをなくゝきゝゆゝゐゝゝゝゝ
いゝゐゝくゝこのゝゝゝゝゐゐゝゝ
てのゝゐゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゐ
ゝゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝ法ゝてあゝよゐゝさゝもゝそ
ゝをゝそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝくゝこのゝゝゆゝりよハ法ゝゝ
ゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○心をせわん　細　心あり世ハ多分ハ我〻よりよくしと

○さゝとゝいすの花　論語云　難乎有恒矣

弄　人の心よりしさいハあり〻〻しく　草の心よ

り〻さくるくし　或抄　人ハ實ゆゑよりなる物也

○こいのれ〻れのれあり妄　花　宇治の中君の事也

いとひんなるさむつひとハ草の我ゆる也

或抄　のれあり妄と云ハ白宮ゆるるくし　草のゆと

絶をうこゝろ浮とよりく〻ゆ浮て草〻とをく〻しく成

浮るや　一説　なとさゝるるゝき物よりつ刃よて

きてゆるくさゝや

しやうやとそゞ〻ぜ　おもゝせそまるんまゝ

こんどせわんんハづゝよ

ぎゝるゝぎやさをどゝるめ

かんのゝゝるさ草つよを

て　さいゆ乃ゝるこのれれあり海

をバつゝゝゝゝあかゆりゆ

えていとびんるさむつび歳

山　ゆゝるこのゆゝしをゝる

とゆりひあゞゆをさゝるゝ

ゞゝものよゆゞゝゝゝゝゞ

ゆりゞゝわゝれあゆゝゝゆ

○〻〻の中よ　細　一説宮〻〻どさしていゝ

○今ハるゝと　孟　人の心ともゝるゝれゝゝゝ

○例のゝれ　花　女一宮とゆゝゝ時のゝる也

○ゆるゝよ　孟　中宮のれ方（渡てゝゝハゝ〻ゝゝ

るゝゝゝゝゞせわゝ人ゝゝゝの

ゆゝふゆんやゝゝゝゝて

ゆゝゆゝゝゝゝゞゝゝゆゞ

つゞゆゝるをゝゝゝゝゝゝゝも

ゆゝゝゞやゆゞゆゝゝよゝゝは

るをゝゝゝゝゝゝゝゝのゝゝゝ

どゝをゆゝるゝゝゝゝゝゝゝゞ

ゆゝゝゝもゆゝゝゝゝゝゝゝ

ハゆゝるゝよゝゝゝゝゝれゝゝ

ゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゞゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ねさまくらかよ　河　故こ将纖手時こ弄ニ小絃耳聞冬
猶氣絶眼見若寫蜂　花仙窟　芸の羽也
花　花仙窟よ世の琴ノ引とうている也
細　人よねさまくらくらもやくよ琴と引と眼ノ
ときいくくうなりろくんの心世段皆花仙窟ノ文ノ
弄　廿二宮のすと心よりてのるり

○うくくきこのくくや　河　容見似舅潘安仁之外甥像
調　蛇兒雀季珪之小妹
花　是も花仙窟の羽也一宮ハ廿二宮のれこのる也
細　花鳥ハ廿三宮のれこのるんとあり又の義ハ白宮ハ廿一
宮の兄ノそまきまを廿ハ廿二宮と又ちくんと点ノ白宮と
又ノ多くくと
○まくくそ　細　芸の羽廿二宮のれとちと是も同
白と用ノり
○例のあるさよ　弄　中宮のれ方よ也

○いつこそも　細　人くくのいる也こくやうのれあそひ
きくるくくと

○てさるくくと　或抄　廿房くちのもくくてときくると其
まくひき活也
○ちのもくくハ　河　呂ハ春律調ハ秋よるくいる心也
弄　秋よ律るるり又廿ハ陰律也

りきをこのれきとすこの花
よ世をを行ぬぬ　おぬぬ
とひるるいぬこまてもゆ
をれぬぬゆまてこそハるさ
世行ゆまとてよ世ゆこの所
分のれぬやしおりつよすぬる
るぬされちとれてしつる
もおゆとおりのるくくのとと
まぬくこよさいぬさるくん
とくぬさなぬくくさるくる
ちのくくべるゆくくるよ
わくくきこゆるくるるれぬさく

○心いきしろ　弄　物の音より心いきしろ也

○我世人やも　或抄　芸の心也　廿三官も一品也

○人々々の弄　廿三官は父市門朱雀院　廿一宮八今上
の御子なれば也

○あゝのうハ　万水　中宮は出給ふる家なれハ心うて芸
のもよふ也

○我もくせハ　或抄　芸の心世朱雀院の姫宮也御わ方ハ
當今の姫宮なるゆゑに心ゆく

○まてるゝ　細　廿一と廿二君　こて也

○世うのこい　弄　玉ゝの住ふ方るとゝや

○これも又ある　或抄　官の御子なれハ也芸の心也

○人々このむ　細　式部卿宮芸ゝとも見給ふ物と也

○人ゝきて　細　人よりこゝろ良也

こゝかしこまてゐてゐてゐ

○人をれば心なし　細　恙の羽
也枝　我心なしとは世ハうの世をそなたきこと
心ゆきぬるハ言語の外と

○とり外と　河　はてふとりとり外よりもるる
君ハりとハるきてはるん
年　心よゆくはるハ羽よハるくるきゆよ言
より外とはるるとり外と
○君ともいひ　嬢　宮の君うとはさとなるひいる
くりこそそよ返るをるる也
○いとなりり　細　うりりの返る也

○ふるうるを　花　宮の君ふしるるよの羽るとる
也枝　とる恙のあるせるとあるるるるハるる
の君しふ祝着と
○るるくの　細　恙の心也るくくのくふとる
そくるるるる
○もとるるる　細　恙の羽也よそるるる也

○えゝそと 或抄 えゝそ 満足をいはれたる

○きゝとゝひ 細 こまかにかなしき心也

花 是は女房の心を女のこゝろをやすく語とをきゝ出

ゝさて宮の君を世にやすく心をひきうこゝろ也

或抄 きゝのきゝとゝひくゝや

○松をむかしの 河 誰をこゝをたゝよはせん高砂の松をむ

かしの友なるかなくよ 花 松を昔のこゝ昔をたれかく

とゝ本よりなるこゝは老人の羽をたゝかうなりもとゝ

きをもちとめるをよれる羽也是は宮の君に近る也

或抄 たゝくしるきをよくの心也

○こゝろをくて乃 花 なをうを宮つゝをるこゝるて独住

なるこゝ語をくはなるこゝろをくきゝ

細 宮の君はいかゝとゝ語をくるなのこゝろくしきをといい

へは太きのをくるをこゝ細めるまゝきを宮の君に出るの

かゝるをくて心今ちとゝろくしきゝ花鳥の心はいかゝ

なてゝ

そもそもなを世こゝ面でえん

こゝとのこゝまつよぎをゝと云

きはぐて、ゝをを門のうぐひ

べあまをび松もゝ乃とゝ乃こ

なぐ絶らくゝもゝかてこゝう

などのくゝまゝすぐはまあやゝ

よゝのりくゝをゝこゝんぼく

こゝもかくいひかゝ松をゝ

いとゝやゝよあつぐやゝぼく

やゝこゝこゝうゝひこゝうゝ

あぐこゝ乃こゝをこゝのゝをも

てゝいとゝおゝこゝうべぐをこゝ面

○所人そ又 花 白宮のゝる也

○あゝこゝのゝや 細 十分なるゝはなゝこ

○又こゝこゝこゝそ 平 こゝれかこゝの人こゝそ世よゝはれ

こゝれこゝはあゝこゝこゝ物こゝの也こゝるゝし

○あゝこゝこゝこゝ 花 是こゝこゝ治のこゝこゝ宮の君

こゝいでこゝ手も人よこゝ

づこゝ物こゝかこゝしゝ

こゝ面こゝこゝこゝこゝもいこ

かこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

きこゝこゝのこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

べこゝこゝかこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

世ゝのゝ七世とゝ[illegible]やうゝゝやすゝいへ浮舟の君なる也

ゝゝのひとゝ盃　やうのゝをゝゝゝを宇治ハ可然ゝゝゝハ宮なゝゝゝゝゝ奇特ゝゝゝゝ

○あやゝゝゝゝゝゝ或抄　大君浮舟ゝゝよ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひゝゝの市ゝゝゝ日・出の如ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ